

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『未来のイヴ』試論
Author(s)	小西, 博子
Citation	フランス文学 , 26 : 37 - 48
Issue Date	2007-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041082
Right	
Relation	



『未来のイヴ』 試論

小 西 博 子

われわれの神々もわれわれの希望も、もはやただ科学的なものでしかないとなれば、われわれの愛もまた科学的であっていけないわれがあらましようか。

『未来のイヴ』 第5巻16章より

フェミニズムの視点から論じられた『未来のイヴ』論では、この作品の徹底したミゾジニーが取り上げられ、リラダンの「ファルスロゴス中心主義」が厳しく指摘される。だが彼は友人宛の手紙で、この作品が「復讐の書」であるとともに「夢の砦に侵入する」という野心を秘めたものでもあることを語っているのだ。¹⁾ 物語はエディソンの独白に始まって、その沈黙に終わる。「夢の砦」で男たちは何を見出すのだろうか。人造人間ハダリーの製作に関わる4人の登場人物を考察しながらその答えを探っていきたい。その答えとともに「未来のイヴ」ハダリーが誕生した時代と21世紀の私たちを結ぶテーマが自ずから浮かび上がってくるはずである。

1. Illusionnisme + Phallogocentrisme

小説の大部分を占めるエディソンとエワルドの会話は、辛辣極まる女性論で成り立っている。パスカル・ロレは、彼らの思考に「イリュージオニスム」と「ファロゴサントリズム」があることを指摘する。²⁾ 「イリュージオニスム」とは、イリュージオン——幻想・錯覚——に由来し、リラダン流の主観的観念論とでも呼ぶべきものである。³⁾ 「イリュージオニスム」においては、「幻影・錯覚」や「現実」という概念は時として価値を逆転する。この小説では主にエディソンの発言に散見されるこの哲学は、「人を惑わす偽りで仮象の現実」、「カオス的な自然の現実」、「社会生活や世俗のブルジョワ的現実」(ROLLET,p.87) と、それらに対置された「絶対的な規範と真実で構成された理想の現実」(Ibid.) との二項対立を軸に展開される。ロレはフェミニスト的視点から、この二項対立とファロゴサントリズムの二項対立を重ね合わせ、「人を惑わす」外界の現実が女たちによって体現され、「理想の」内界の現実が専ら男たちのものとされる図式があると指摘する。「自然的・物質的・女性的現実の錯覚がもたらす危険」(Ibid.p.88) に対し、イリュージオニストの男たちはファ

ルスロゴス中心主義の支配する「第2の、脳内の現実」(Ibid.p.88)で対応しているというのだ。ロレはこの「イリュージオニスム+ファロゴサントリズム」の論法をさらに糾弾する。「理性・自我・精神・知性・意識は男性に属する」(Ibid.p.89)とされ、「男は光、女は闇」(Ibid.)に喩えられている。また、「知性を欠き」、「全知のまなざしを持たぬ」(Ibid.p.90)女性の魂は「聞こえず、見えない」(Ibid.)ものとみなされている。しかしながら、男性-精神-文化/女性-物質-自然の二項対立で優位に立つはずの男性も「全知のまなざし」を持つわけではなく、知覚の問題を抱えている。エディソンはエワルドに「イリュージオニスム」を説く。

われわれは自分の眼が対象の中に呼び覚ますものしか見ることができないのです。物を見るにしても、その神秘的実体がかいま見せてくれる部分しか見ることができません。各自の天性に応じて感じ得るものしか自分のものにする事ができないのです。人間は、生真面目なりスのようなもので、「自我」という動く牢獄の中で虚しくあがくばかりで、自分のつまらぬ感覚によって閉じこめられている「錯覚」からのがれることは不可能なのです。(pp.839-840)

エディソンの友人アンダーソンがかつてこの「錯覚」の犠牲者となった。エワルドを「錯覚がもたらす危険」から守るのが、他ならぬその錯覚を逆手にとった人造人間 *Andréide-Paradoxale d'Edison*⁴⁾なのである。

この作品の原型となったコントは、近代かつ画期的を装った偽発明品をでっち上げてブルジョワ的な金権功利主義や道德観を揶揄するコント——『天空広告』『栄光製造機』『断末魔の吐息の化学的分析器』など——の系列に属するもので、ガイノイドを大量生産する話だった。⁵⁾ 1820年に発掘され、翌年フランスに持ち込まれた『ミロのヴィーナス』のコピーが、ミニチュアのフィギュアや写真の形で大量に出回ったこととの関連も指摘されている。⁶⁾ 再びロレによると、男性主体は女性を「物質・負・基体」(ROLLET,p.94)の位置に置くシステムに依存しているという。女性は男性主体の「経験の対象」(Ibid.)となるが、「闇から出でて、話し、見、とりわけ見られるや否や、男性の精神の内的理想的空間でのみ機能するイリュージオニスムの完璧な秩序を乱す」(Ibid.)というのである。

フェミニストの言説風に述べるならば、婚姻制度や道德観に至るまで、近代産業やブルジョワ社会を基盤に成立するファルスロゴス中心主義において、他ならぬエディソン-エワルドをはじめとする男たちの関係に、男性社会を支える「男同士の絆」——ホモソーシャルな関係——を認めることもできるだろう。しかし、共和国と科学の勝利が、家父長制と資本主義と階級社会を強固なものにしたとしても、進

化論や唯物論の出現以来、「神の死」はますます否定しがたく、科学や進歩が神に代わる十全な真理と現前を与えてくれるわけではない。冒頭のエディソンの独白「生まれてくるのが遅かった」(p.770)はそのアイロニーゆえに象徴的である。⁷⁾

2. Phonographe—Edison

科学者エディソンの発言に散見される宗教的懐疑は、神の存在や御言葉を茶化す独白の部分に端的に表現されている。

神——至高の神、善き神、全能の神——は、周知のごとく、太古から多くの人々の前に姿を現し給い、人々もそれを断言し、それを否定することは異端者のレッテルを免れないのだが、せめて、このトーマス・アルバ・エディソンにそのお姿をほんの少しでも写真に撮らせて下さり、その真のお声を蓄音機に吹き込むことをお許し下さっていたなら、その翌日から地上には一人の無神論者もいなかっただろうに。(pp.788-789)

ロレによれば、「超越的支配を表すロゴスのない世界」(ROLLET,p.91)で、「言葉はシニフィアンの物質性と自律性を獲得し、多数のシニフィエを充当しうるようになる」(Ibid.)。また「言語はアンドロイドや身体性に還元された女性のように、意味作用をなすため外部の力によって動かされるのを待機している一つの空虚な構造となる」(Ibid.)。ハダリーの肺に詩人や思想家の珠玉の言葉を録音したものをはめ込む計画を聞き、自分の問いかけに意味をなす答えが返ってくるのかと疑うエワルドに対して、エディソンは「すべての言葉がすべての答えになりうる」「人類言語の万華鏡」(p.913)においては、「曖昧で、暗示的で、不思議な知的弾力性を持った言葉がたくさんあります」(p.913)と答える。「声の物質的側面」(ROLLET,p.91)を強調し、振動を「固定し」(p.784)、「記録し」(p.770)、「刻み込む」(p.770)という操作を以て、「話された言葉に対して書かれた言葉を優位に置くことで、エクリチュールを支配し」(ROLLET,p.92)、人間(=男)は「真理の保有者」(Ibid.p.91)となって「神の言葉に代わる、男性的特権に基づく新しい超越性」(Ibid.p.92)を得るとロレは述べている。一方、言語の問題こそ、女性についての男性の観念を最もよく表していると強調する。この言語の男性中心主義では、女性は「言葉の外側」(ROLLET,p.92)——身体的な声や意味のない物音のレベル——に置かれ、男性を悩ますものとしてしばしば発言を中断される。アリシアの発言はほとんど間接話法や自由間接話法でエワルドを通して語られ、言葉の使い方はずれているという。⁸⁾

ロレはエディソンの言語観に、言葉の等価性や恣意性、シニフィアン連鎖など構造主義の言語論に近いものを認め、男性による言語の占有を糾弾する。エディソンは「録音」という新しいエクリチュールの支配で「真理の保有者」になれると考えているのか。そもそも「運命の神は、人間の言葉がもはやひとつも保存するに値しないとしか思えないようになってからやっと、私の蓄音機が世に出るのを許してくれるとは」(p.776)と嘆いている。「思想というものは、世紀がかわるごとに、それを反映する人によって左右される。」「肝心なのは音を聞くことではなく、振動というヴェールの内にある創造的なものを聴き取ることなのだ。」「過去の物音の内面的な意味(物音の「真の実在性」)が分析精神によって失われてしまったので、「たとえ他の時代の振動を録音したとしても、私の機械では死んだ音しか表現していないことになる」(pp.776-777)「見ることができない」というイリュージオニスムは、ここでは「聴き取ることができない」に置き換えられている。聴覚は他者の声から「言わんとすること」を聴き取るという理性の機能であり、視覚以上に知性に関わる。しかしエワルドがアリシアに感じる「言語の壁」は、用法の不足や曖昧さからくるコミュニケーション不全という言語に内在する問題でもある。聴き取ることは、語り手が「言わんと望むこと」(意味)を聴き手が「聴きなす」「思いなす」ことである。聴き手の欲望や思い込みかもしれない、語り手の意図とのずれが入り込む。⁹⁾

エディソンはこの状況を逆手に取る。「知性そのもの」(p.910)であるハダリーの胸の録音を意味の歴史的集積である用法の束、いわばデータベースとして、ハダリーの答えの「深さ、美しさを創造する」(p.913)のは、エワルドの問いの如何によると説く。「聴きたい」答えを得るように問いを発する聴き手が、ずれや曖昧さをも逆用して望む答えに「聴きなす」木霊のように一方通行でナルシシクな一人芝居に他ならない。「真理の保有者」たる神という「大文字の他者」は信仰と共に失われた。科学はその不在に代わり真理を保証することができない。科学にせいぜいできるのは、言語という「大文字の他者」の代替物——黄金の蓄音機¹⁰⁾というナルシシクな「幻影の全能」(p.845)の装置——を提供することなのである。

3. Unheimliche vs. Narcissisme——Alicia vs. Ewald

「絶対的な規範と真実で構成された理想の現実」だけで生きていけない男性主体は「経験の対象」に近づく。よき夫、よき父であったアンダーソン同様、結婚を神聖なものと考えていたエワルドも、偶々出会ったアリシアの完璧な容姿に魅せられ愛人になってしまう。ところが愛の経験の対象であり視線の対象であった恋人が、「死よりも苦い快樂」(p.815)で自分を「ガリバーの如く」(p.807)「囚われ人」(p.814)

にするかに感じられ、「デリラに髪を切られた」(p.807) ように無力感に襲われると、「官能さえ凍り付いて」(p.817)、恋人から視線をそらせたり、ついには「死んだ姿を眺めたい」(p.817) と願うに至る。アリシアは、水の美しさで引きつけ、身を浸したものを石に変える「澄み切った泉」(p.817) に喩えられている。「カオス的自然の現実」に身のすくんだ男は、元の安全な「理想の現実」にも戻れず、「勇気を出して肉を捨てる代わりに霊に覆いをかけるようになる」(p.807)。エワルドは、自分を「押しつけ、また引きつける生ける二重性」(p.816) であるアリシアから逃れるために死を決意し、別れを告げに旧友エディソンを訪ねる。

女性から視線をそらすことや女性を「物」として見ることについては、アン・グリーンフェルドがメデューサーペルセウスの関係に喩えて、この男性の「防御姿勢」(ROLLET,p.93) を考察している。¹¹⁾『メデューサの首』でフロイトが、恐怖で石に変わることも男性の力の肯定と解釈している¹²⁾のに対して、グリーンフェルドは「ペルセウスがメデューサの首を落として女を滅ぼすのは、自分自身の欲望の麻痺的な力から解放されるために自ら去勢を行っている」(GREENFELD,p.69) と考える。ペルセウスは楯の鏡でメデューサを間接的に見ること——メデューサの姿と同時に彼自身の姿を見ること——すなわち「自分との関わりで見られたメデューサの影に視線を限ることで、他者としての女性への性的欲望を制御しえた」(Ibid.) と解釈している。ペルセウスのように、エワルドはアリシアから視線をそらして、楯の代わりにアンドロイドの甲冑に自分の鏡像を映す。「メデューサーペルセウスの関係の逆ヴァージョン」(Ibid.)、「ピグマリオン—ガラテアの関係に倣って、女性は彫像の形で釘付けにされ、男性の意志で創られ、生気を吹き込まれるまでは無力な状態にとどまる」(Ibid.) というのである。性欲の制御、男性性の切断の一つの解決法は自ら命を絶つことであり、エワルドが試みようとした選択である。もう一つの選択が、「自分自身に視点を転じ、他者としての女性への欲望を昇華させるナルシズムである」(Ibid.p.71) とグリーンフェルドは指摘している。

楯に代わりナルシズムの装置となる「女性形の甲冑」(p.828) ハダリーは、「男性の理想のイメージを投影するための完璧なスクリーン」(ROLLET,p.94) となる。しかも「ハダリーの特質は、どんなに燃え上がった心からも、数時間のうちに低劣下賤な欲望を消し去ること」(p.905) にある。ハダリー完成がエワルドの命を救うことを説得するにあたり、エディソンは恋愛のメカニズムを解き明かしてみせる。アリシアの肉体と魂のギャップに悩むエワルドは、アリシアが真の自分を隠して下劣な人間を装っていると思ひ込みたくて、彼女の架空の脳内ストーリーまで作り上げてしまう。エディソンはそのごまかしを容赦なく暴いていく。

あなたが恋人の中で愛しておられるもの、あなたにとって「唯一」「本物」だと思っている存在は、この通りすがりの女性の中に「現れている」ものではなく、実はあなたの「欲望」の実体なのです。それはつまり実際には存在しておらず、あなたも「存在していないことをご存じ」のものなのです。(…) 現実のアリシアの致命的でおぞましく乾き切った虚しさに絶え間なく味わわされる幻滅にもかかわらず、「それでもなお」あなたが恋人の中に「生かそう」と努力しているのはその「幻影」なのです。(…) その「影」のためにあなたは死のうとしていらっしやる。(…) これは、あなたが恋人の中に、呼び出し、見出し、「造り上げる」、あなたの精神の客観化された幻であり、「恋人の中にあるあなたの魂のもう一つの半分」に他ならないのです。(p.841)

エディソンはここで「自分の欲望が見たいと念じるもの——幻影・錯覚——しか見ることができない」を「自分の見たいものだけを見ることが出来る」に変換する。「幻影には幻影を、ハダリーと呼ばれるこの合成の「存在」は、その存在を「あえて」理解しようとする人の自由意志にかかることとなります。この存在にあなたの存在を吹き込んでやって下さい。」(p.842) どのみち恋愛が「脳内の現実」の「現実感」であるなら、ヴァーチャル・リアリティにはヴァーチャル・リアリティを。幻影・錯覚は価値をプラスに転じ、イリュージオニスムはポジティブな哲学に変わる。スクリーン上で魅力的に舞い踊っていたアンダーソンの愛人エヴリンから鬘や義歯などの人工物を一つずつ取り除くと何も残らなかった。「逆説的に」、実は無に他ならぬもの（黒いヴェールで覆われた顔）に各種の人工的パーツを足していき、最後にリアリティを付与したのが、「エディソンの逆説的アンドロイド」なのである。ハダリーはエワルドの視界から、物質・自然・身体性・他者としての女性性を遮る楯となり、エワルドのナルシシクな自意識を映すスクリーンとなってくれる。

グリーンフェルドは、イリガライが『検視鏡』の中で、「フロイトが男性は女性を理解できないもの、ゆえにUnheimliche——不気味で恐ろしいもの——と見なしていること」に言及している。¹³⁾ フロイトは『不気味なもの』と題する美学論で、ホフマンの『砂男』などを手がかりに「不気味さ」——unheimlich——の分析を試みているが、この言葉の概念内容について、heimlichのもつ「親しい、なじみの」が「神秘的、無意識な」から「隠された、危険な」に転じて、反対語と一致するという両義性から生じたunheimlichは、「heimlichの一種である」と説明している。不気味なものとは、一度抑圧を経て再び戻ってきた「馴れ親しんだもの」と定義し、その例として女性性器を挙げる。¹⁴⁾ この不気味さ、恐怖は、クリステヴァがさらに精緻なものにした「アブジェクション」（おぞましいもの）に相当するだろ

う。原初の無秩序な母性的空間内で生じた、自他の区別がわからない恐怖であり、去勢の恐怖に先立つ恐怖である。幼児のナルシズム的世界、いわゆる鏡像段階で母子関係に生じる愛憎のアンビヴァレントな感情に由来するものである。¹⁵⁾ 生身の女性の身体性やまなざしに関わる去勢不安や、死という原初状態へのアンビヴァレンスをさえぎるスクリーンであるハダリーは、エワルドのナルシシクな幻想で覆われた空虚を表象している。リビドーを対象から自己像あるいは自己の理想像へと移して脱性化するフロイト的「昇華」に対して、ラカンの「昇華」は対象を空虚によって代表象される「もの」——das Ding——の尊厳にまで引き上げる。ハダリーは到達不可能な美や理想を、その内部の空虚によって指し示す。¹⁶⁾ 「理想への旅人」(p.865) である男たちが希求する「失われた天国」(p.845) を指し示すのである。

4. Âme?—Sowana

「誰かがあの身体からあの魂を取り除いてくれないかなあ。」(p.814) このエワルドの一言が、エディソンにハダリーの完成を促した。ただし、メフィストフェレスのように「魂を奪う」のではなく、肉体でもなく魂でもないただの外形、アリシアという「固有性」(p.835) のみを奪うことになる。その内部の空虚に蓄音機を装填し、あとはエワルドのナルシシズムがハダリーに「存在」を与えるはずだった。ところが、エワルドとの公園での出会いの場で、完成品のハダリーは想定外の言葉を語り、しかもそのことをエディソンに告げぬよう口止めする。

エディソンを裏切るハダリーの行為については、「ソワナのエディソンに対する復讐」という解釈がある。¹⁷⁾ 夫の死によるショックから昏睡状態に陥っていたアンダーソン夫人が、催眠療法をきっかけにエディソンと流体で結ばれ、透視力を得て「ソワナ」という別人格で語るようになったいきさつがエディソンから明かされる。¹⁸⁾ この「ソワナ」が最終的にハダリーに乗り移ったとエディソンは説明する。エワルドが最初おののいたハダリー(=ソワナ?)の語りは、幻想的なイメージに満ちている。まず、精神が夢うつつの時、「理性と感覚の足かせ」(p.986) から逃れた時に垣間見るような「限りなく自由な領域」「精霊の領域」(p.986) の存在をエワルドに教える。理性が「空想的なもの」(p.986) とかたずけてしまうような「無限の領域」「夢想と睡眠のあわいでしかその国境を垣間見ることのない領域」(p.990) からの「救護者」「使者」(p.990) として未来からやってきたという。そこでは「時間は一つになり、空間もなく、本能の最後の錯覚も消え失せている」(p.990)。エディソン自身、完成間近、ハダリーの蓄音機の機能の完璧さに「人間を超えた存在」「ある魂」(p.1012) の介入の可能性を認めたものの、すべてを把握してはいないらし

い曖昧さをみせる。デウス・エクス・マキナのソワナの出現は、それまでの擬似科学的な説明の一切を無効にするかにみえるが、リラダンの当初からの意図ではなかったようだ。¹⁹⁾ ソワナの意味するものを考えてみたい。

フェミニスト的解釈では、ソワナの存在はファルスロゴス中心主義の抑圧に対する女性側からの反撃である。ロレは自らの論文のタイトルに、ハダリーの声のもつ「この世のものとは思えぬ女性的抑揚」(p.872) という表現を使用し、ソワナは「抵抗する女性の声」「無意識が発した声」(ROLLET,p.101) に他ならないという。シクスーをはじめとするエクリチュール・フェミニンが表現しようとしたもの——母性や母の声——を示しているのだろうか。確かに女性性の強調は、エワルドーエディソンのホモソーシャルな関係を絶ち、エワルドーハダリーの女性的関係に視線を転じるものである。ジャック・ノワレも「プロメテウスの欲望、世界の秩序への侵犯、意志の勝利」(NOIRAY,p.48) といった男性の論理から、感情や心、「存在の調和、新しい愛の可能性」(Ibid.) など女性原理へ重点が移動すると述べている。ロレは、カステクスが幻想小説についていう「人間の論理的理性には還元しえない側面」(ROLLET,p.101) ——Unheimliche——を表す「抵抗する声」が、ハダリーの破壊で沈黙させられることを示唆して論を結んでいる。

フロイトは『不気味なもの』の中で、精巧な人形や自動人形の与える印象が、「一見したところ生きている存在が本当に生きているのかという疑念、逆に、生命のない事物にひょっとしたら生命があるのではないかという疑念」を抱かせることに言及している。²⁰⁾ トドロフも『幻想文学入門』の中で、幻想を超自然的不可思議merveilleuxと説明できない奇妙さétrangeの未決状態と定義し、幻想の精神分析的解釈の例に、フロイトが最もunheimlichなものとして「仮死のままの埋葬」を挙げて「母胎内生存の空想の変形」と解釈する箇所を引用している。²¹⁾ 自然や身体性・女性性を排除しようとする理性・科学・文化など男性性のナルシシクな幻想は、再び「不気味なもの」、不可解なもの、曖昧なもの、物質とも精神とも言えぬもの、生とも死とも言えぬもの、言葉を超えたものに出会うことになるのだ。

おそらくソワナは重層的・多角的に解釈すべきなのだろう。ソワナに抑圧された女性性や母性からのメッセージ、あるいは集合的または個人的な無意識を読み取る精神分析的な解釈はもとより、随所にある隠微学的・神秘主義的言及も看過できない。エディソンがハダリーを天使と呼び、スウェデンボルグを引用する場面がある。エワルドは、アリシアの肉体と魂の不調和について「形成媒体」(p.798) というネオ・プラトニズム的概念を用い、アリシアが罰として間違った肉体に閉じ込められていると述べる。『アクセル』のヴァリエーションに類似の表現が認められる「神秘の世界に住む未だ未来のものである人々」(p.986) や「非人格性」(p.992) 「天上の肉

体」(p.992)「死の領域を見通したことがある」(p.991)等の表現は、いわゆるアストラル界など個性を離れた魂や天界の領域を暗示しているようだ。

エドワード・リードによれば、19世紀半ばには、常に意識的とされたデカルト的二元論の心的状況以外に、無意識的状态の存在が次第に広く受け容れられるに至り、意識的な心・無意識的な心・身体三元論が唱えられるようになった。19世紀後半においては、「無意識的な心は純粹な(意識的な)心でも、純粹な(機械的な)身体でもなく、まさに魂であるという見方」が一般的になる。無意識の心がもつ基本的特徴は「夢をみること、催眠による暗示感応効果、意図されざる行為」など、降霊会やトランス等の心霊主義的な活動の人気の高まりとも関連するものだった。ハダリーが語っていたのは昏睡状態のソワナの夢の無意識なのだろうか。あるいはハダリーに「存在を吹き込む」エワルド自身の無意識であるのかもしれない。

さらに一つの解釈は、ソワナの魂がハダリーに乗り移ったとするエディソンの説明と異なり、機械のハダリーが「意識」を持つに至ったという解釈である。蓄音機が完璧に機能する場面はチューリング・テストにパスした人工知能を思わせる。²²⁾ 身体性を持たぬハダリーが意識を持つとすれば、「存在というものがどこから始まるのか、その本質は何か、その概念はどう定義されるのか誰にもわからないではありませんか」(p.992)というハダリーの問いは、まさしく理性・科学・言語が答えることができない未知の領域に属するものである。エディソンはこの未知の領域、「イマジネール」の領域を前にして身を震わせつつ黙り込む。「夢の砦」に他ならぬこの領域は、無意識の世界か、魂の故郷か、人工知能の空間か、あるいは「死の領域」なのか。おそらくリラダン自身、空想を拵けてくれる科学の驚異に魅せられつつも、科学の発展に伴って現れた実証主義や自然主義の蔓延にはアイロニーを武器に戦っていた。科学が生の意味も明らかにしてくれるという期待、「魂の科学」への期待はすでにロマン派の間にもあった。ところが、実証主義的な実験心理学が確立し始め、魂の問題は不可知論によって遠ざけられる。にもかかわらず、魂への科学的アプローチは19世紀全般に亘って一部の科学者の間で根強く存在し続け、民間では無意識や催眠術、降霊術などへの関心が広がった。当然19世紀においては、心・身体・「魂」の科学的論争は、常に宗教的議論と無縁ではなかった。20世紀、「魂の科学」は「心の科学」に変わったが、実験心理学によって3つに分解された心・無意識・身体を、科学は相互に関連づけることができただろうか。²³⁾

『未来のイヴ』は「自己」の抱える心身の問題や他者との関係について、21世紀の私たちにも問いかける。身体性に閉じ込められた人間が、心身問題そのものから解放される方法は、死以外ない。自我というナルシズムの牢獄で、男性主体は他者や世界と一体になれず、ただ存在の充溢(全体性)が回復されるのを信じ、幻想

を抱き続ける。生身の女性ではない他者、身体性のない他者であるアンドロイドは、男女両性の間の埋められぬ空虚や私たちの避けられぬ死を覆い隠す「救護者」、あるいは私たちを不可能な無限の領域へと誘う「使者」の役割を果たすというのだろうか。その一方で、人間の脳の方が、マインド・リーディングやデコーディングによって身体性を介さずに意思決定を行うようになる日が来れば、人類は身体性のみならず「統一された自己」からさえも「解放」されるということになる。²⁴⁾

冒頭の引用は、映画『イノセンス』（2004年、押井守監督）のエピグラフである。アイデンティティさえさだかでない主人公の「男女」の、性を超越した「愛」は、ナルシシクヴァーチャル・リアリティに慣れて身体性を失いつつある現代の私たちに、「他者」との結びつきとは何かと問いかける。自前の身体をほとんど持たず、ゴースト（魂）だけがかろうじて残っている彼らサイボーグたちは、「逆説的に」、人間の身体性を際立たせる。フロイトは『ナルシシズム入門』の中で、リビドーの対象備給の最高段階である恋愛は、根源的ナルシシズムを性的対象へ転移すること、理想化された対象のために自我リビドーが乏しくなることだとして、主体の個性の放棄を前提とする。²⁵⁾ ジョーン・コプチェクは、他人を愛することで自己を放棄するわけではなく、「わたし」は対象備給からやってくる「身体経験」であること、対象を愛することが教えてくれる享樂ゆえに自己の肉体的な経験——「我愛するが故に我あり」——があると解説する。²⁶⁾ 他者についての錯覚的認識や自己の内面の反映であるナルシシズム的愛も、首尾一貫した「身体としての自我」を媒介としてこそ成立する。ゆえに冒頭のエディソンの挑戦的な問いかけにはこう問い返そう。「われわれの愛が身体的であっていけないいわれがありませんか」と。

注

テキストはVILLIERS DE L'ISLE-ADAM, *Œuvres Complètes*, t.1, Bibliothèque de la Pléiade, 1986 を使用し、文中の引用は拙訳に続き括弧内に頁数で示した。

- 1) *Correspondance générale*, t.1, Mercure de France, 1962, p.262. ある英国人女性との破局が執筆の動機の一つといわれている。
- 2) Pascal ROLLET, *Inflexions d'une féminité surnaturelles, la voix résistante de L'Ève future Villiers de l'Isle-Adam, Jeering Dreamers*, Rodopi, 1996, p.87.
- 3) Alain RAITT, *Villiers de l'Isle-Adam et le mouvement symboliste*, Corti, 1965, p.245.

初期の作品『クレール・ルノワール』で展開した個人的なヘーゲリアニズム——「精神が宇宙の根底かつ目的である」「我々は感覚に欺かれ、事物をあるがままに認識できない」etc.——を、その後自ら「イリュジオニズム」と名付けた。

- 4) Andréide (大文字で始まる) はリラダンの造語である。
- 5) *Le Sosie* (1878) コント——*L'Andréide-Paradoxale d'Edison* (1878) 中篇小説——*L'Ève nouvelle* (1880-1881) 長篇小説。——*L'Ève future* (1885) 長篇小説と発展した。1878年、蓄音機と電話がフランスに紹介されてエディソンが一躍有名になり、科学の啓蒙書が相次いで出版された。また同年5月にパリ万博が開かれ、自動人形や機械じかけの鳥、鬘、義歯なども展示されたという。cf. Jacques NOIRAY, *L'Ève future ou le laboratoire de l'idéal*, Belin, 1999, pp.23-24.
- 6) cf. Marie LATHERS, *The Decadant Goddess: L'Ève future and the Vénus de Milo, Jeering Dreamers*.
- 7) 万博当時、ジャーナリズムが科学技術の進歩を賞賛する際の決まり文句だったらしい。cf. NOIRAY, p.32.
- 8) ROLLET, p.92.
- 9) cf. 原和之『ラカン 哲学空間のエクソダス』講談社, 2002, 第3章.
- 10) この蓄音機とマラルメの「書物」との類似を指摘する研究もある。cf. Felicia MILLER-FRANK, *Edison's Recorded Angel, Jeering Dreamers*, p.141.
- 11) cf. Anne GREENFELD, *The Shield of Perseus and the absent Woman, Jeering Dreamers*.
- 12) cf.フロイト『メデューサの首』フロイト全集17, 須藤訓任訳, 岩波書店, 2006.
- 13) GREENFELD, p.67.
- 14) cf.フロイト『不気味なもの』フロイト全集17, 藤野寛訳, 岩波書店, 2006.
- 15) 西川直子『クリステヴァ』講談社, 1999, pp.232-234.
- 16) cf.フロイト『自我とエス』フロイト全集6, 井村恒郎他訳, 人文書院, 1970. ジャック・ラカン『精神分析の倫理 (上)』小出浩之他訳, 岩波書店, 2002.
- 17) ROLLET, p.97.
- 18) 電気磁気は生命力と結びつけて考えられており、19世紀半ばでも電気心理学では、魂と身体を結合するのは電気磁氣的なもののみなしていた。またロマン派には非合理や漠然とした感じ、自然との一体感を表すのに使われていた。その後動物磁気(マニエティズム)やメスメリズムは心的過程と証明されて催眠(イプノティズム)と言い換えられる。cf. エドワード・リード『魂から心へ』
- 19) 決定稿以前は、エワルドが完成したハダリーを連れ帰るところで終わっている。最終的にソワナを導入したりハダリーを破壊したりしたのは、エワルドが幻想を維持することの困難(cf.『ヴェラ』)や一度実現した理想の瞬間は持続し得ないという完全主義(cf.『アクセル』)に因るところも大きいと思われる。

- 20) フロイト『不気味なもの』 pp.16-17.
- 21) Tzvetan TODOROV, *Introduction à la littérature fantastique*, Seuil, 1976, p.158.
- 22) cf. Carol DE DOBAY RIFELJ, *Minds, Computers and Hadaly, Jeering Dreamers*.
- 23) cf. エドワード・リード『魂から心へ』村田純一訳, 青土社, 2000.
- 24) cf. 『現代思想』10月号, 特集「脳科学の未来」, 青土社, 2006.
- 25) cf. フロイト『ナルシシズム入門』全集6, 井村恒郎他訳, 人文書院, 1970.
- 26) ジョーン・コプチェク『女なんかいないと想像してごらん』鈴木英明他訳, 河出書房新社, 2004, pp.113-116.